

## 滋賀大を語る(三)

## 大学そして大学教育

**司会** 今日は広報誌の座談会「滋賀大を語る」の三回目として、『滋賀大学のこれからを考える』と題して経済・教育それぞれ若手・中堅の方々三名ずつお集まりいただき、個人の立場で忌憚のない自由なご意見を伺いたいと思っております。まず、大学教育に関してご意見を伺っていききたいと思います。

**小倉** 大学においてどういう教育をするのかということで、先生方の間にいろんな考え方があります。経済学部では、ある程度のレベルの学生が入学しているんだから、放っておけば大学での四年間でいろんな経験を積み、それなりに使える社会人になるという考え方の先生もいるし、あるいは、専門学校のようにキチツとした知識を詰め込んでいくのが大学教育じゃないというふうに考えてる先生もいらっしゃる。その一方で、今の学生のレベルを考えてみると、ある程度手取り足取りして教官側でレベルを引き上げる必要があると思ってる先生もいます。そのへんで、今のところ、両方

の考え方がぶつかり合うというか、むしろまとまらなくて方向が定まらない、あるいは、方向を定めようという議論も活発には行われてない、そういう状況だと私は思っています。

**司会** どうされたらいいと思えますか。  
**小倉** もう少し、本音をぶつけ合った議論ができる場所がいくつもあって、その中から、新しいカリキュラムなり、新しい教育システムなりをたたき出してくるというのができればいいんですけど。今のところ、委員会に任されているのですが、委員会も時間的制約が過ぎて、とりあえず、カリキュラム改革を、ということになる。その経緯と理由を理解する間もなく、教授会を通してしまうこともある。その点は反省したいですね。変えた部分の意味が明確でない、というような感じが今までのところあるんですけど。  
**秦** 変わることが常に重要であるとは思いませんが、社会の変化に感じ切れておらず、また対応できていないことに

対する危機感が大学の中にあまりないように思われます。

**司会** 教育学部の方は、どうでしょうか。  
**久保** 教育学部はまず、出口が今とても大変な状況、むしろ危機的な状況です。特に、出口のために何かするには、小倉先生が言われた手取り足取りという教育をする必要に迫られていると思うんです。教員採用試験のために、別の講義をやったりとか。とりあえず、結果を出さないことには、今、本当に教育学部はつぶれてしまうかもしれないという思いをみんなが抱いて、焦っているような感じがします。ただ、今はそういう教育をしなければいけないかもしれないけれど、一方で、それが本当に大学教育としていいのかどうかという疑問もみんな持っていると思います。

## 座談会出席の皆さん(五十音順)

**岩井 憲**(いわい けんいち)  
教育学部講師：知識工学

**小倉 明浩**(おくら あきひろ)  
経済学部助教授：比較経済論

**久保 加織**(くぼ かおり)  
教育学部助教授：食物学

**中野 桂**(なかの かつら)  
経済学部講師：政策経済論

**秦 由美子**(はだ ゆみこ)  
経済学部助教授：国際文化システム

**馬場 義弘**(ばんば よしひろ)  
教育学部講師：政治学

**千本木修一**(せんぼんぎ しゅういち)〔広報委員〕  
経済学部教授：政策経済論

(司会) **磯西 和夫**(いそにし かずお)〔広報委員〕  
教育学部助教授：金属材料学

# 教師って 素晴らしい職業



久保 教育学部助教授

近畿でも、大阪とか京都とかでは、難しいけれども教師になりたいという気持ちも、大学四年間持ち続ける人がたくさんいるんだそうです。また、採用試験を受けて失敗しても、何年か非常勤をやった、経験を積みながらチャレンジし、何年かかけて正式に採用される

という例が多くなってきています。教師って素晴らしい職業なんだということをいつまでも持ち続けて、何回もトライして、頑張っていくという姿勢がちょっと他大学に比べたら少ないのかなという印象はありません。馬場 滋賀大の教育学部には良い教師になる資質をもった学生が大勢います。私は他学部出身なのでそういう印象を強く受けるのかもしれませんが、教育実習の様子などを見ていて、いつもそう思います。学生は生徒のことをよく観察していますし、教え方も上手です。ただそれが採用試験の結果に反映されないのが残念です。競争試験に勝ち抜く資質には欠けるのでしょうか。司会 気持ち的に、それとも学力的に。馬場 学力云々ではなくて、自己管理が苦



中野 経済学部講師

手なんでしょう。試験勉強の準備を始めるのも遅いようです。だからといって講義内容を試験対策的なものにするのは面白くないですね。大学教育は、「こういうカリキュラムを用意しています。これによって優秀な人材が育つのです」と、自信をもって言えるものでありたい。私自身は、カリキュラム云々よりも学生と対話のできるゼミを一番大切にしたいです。一、二回生の基礎ゼミでは一〇人以上になりますが、三回生になると二、三人ぐらいでやります。学生にとっては報告の順番がすぐにまわってくるのでかなりきつそうです。卒論指導ともなると、ほぼ一対一で論文作成の指導にあたります。この卒論を通してのトレーニングによって論理的な思考力と表現力を鍛えるのは学生にとっても教員にとっても楽しいのではないのでしょうか。中野 学生の大学での四年間というのは、すごく吸収も速いじゃないですか。ですから、学力の低下とかも言われてますけど、四年間を上手にわれわれがキチンとしたプログラムを提供したりすることができれば、いろんなことができるんじゃないかなと、漠然とした話ですけど思ってます。小倉 大学内の委員会で、一年間の単位数取得の制限、セメスター制、あるいは、秋期入学とか、いろんなことが話し合われています。そういう中で、滋賀大学として外に向かってどういったアピールをするのかとか、あるいは、滋賀大学全体としてどういった学生を育てるのか、というような話ので

# 研究活動の発展に向けて



小倉 経済学部助教授

きる機会をもっと作っていかなくつちやいけない。それとも、学部は各学部で大学教育の話をしていればいんでしょうか。学生の時から自己紹介する時に、「滋賀

大学の」というのは、あまり言ったことなくて、「滋賀大学経済学部の」としか言ったことがないんです。教育学部の学生さんとかもそうだと思うんです。たとえばクラブ活動も両学部一緒にする機会が少ないですよ。滋賀大学のというよりもそれぞれの学部という意識が強い。だから、もう少し、教養教育でも、教員あるいは学生が相互に両キャンパスを往復したりするとかあるいは、少なくとも教養課程、学部共通科目の単位数とか、ある特定の教育プログラムは両学部共通で揃えるとか、そういうことの必要性について早く決着をつけて欲しいなと思います。

**岩井** 個人的に疑問に思うのは、全学共通科目というのは、果たして何のためにあるのか。一回生二回生のレベルで全学共通科

目を組むだけだったら、あんまり意味がないのと違うのかなと思うことが時々あるんですよ。全学共通科目をやるだけ余計にカリキュラム枠が一つ増えて、余計大変になるんじゃないかなと思ってしまふことがよくあるんです。もちろん、滋賀大として一つのコンセンサスを形成したうえで大学全体としてどういふふうにするのか。たとえば、研究活動も両学部で交流を持つようにするとか、もっと踏み込んでいった方が効果的ではと。しかし、お互いに交流を持つとしても約六〇kmはなれている。移動の問題、効率の問題などがありますね。

## 研究活動について

**司会** たしかに両学部の教育の連携を形にするには地理的条件を抜きにしては考えられませんね。次に、大学の教官として私たち自身について、研究活動についてお話を伺っていきたいと思います。これは皆さんのご専門によって状況が全く異なってくると思います。

**馬場** 非実験系で研究費は元々少ないので、多少減っても余り打撃はありません。私の研究テーマは日本政治史ですが、大学の枠を超えた共同研究に参加したり、あるいは地方自治体からの委託をうけて調査・執筆をする機会が多いです。外部資金等を利用して資料収集できるのはよいのですが、ただ一番やりたい研究テーマが後回しになる

のでちょっと辛いです。ところで最近の改革論議のなかで、大学を企業に見立てて市場原理で競争させようとする意見がありますね。もしそうなれば、大学になんの利益ももたらさないような自治体の仕事や、他大学の研究費増加に貢献するような共同研究に参加するよりも、滋賀大学の名前を冠した研究プロジェクトを積極的に立ち上げる必要が出てくるのでしょうか。大学の活性化をもたらす反面、社会的には失うものが大きいかもしれません。

**司会** 現実、これから先を見ていくと、校



馬場 教育学部講師

費が増えることは多分ないだろうと思われるんですが、一つの予算として、学内でのいろんなプロジェクトを申請して、その中でいくつか採択されて研究費を貰うような形になってますよね。今年から若手特別枠が出

# これからを見て



岩井 教育学部講師

来ましたけれど。久保 年齢的に若手の枠からはずれた場合、個人研究のようなものが申請しづらい状況ですね。基礎的な研究と

予算の運用が変わっていくのは仕方がないですが、もう少し広くいろいろな個人研究や基礎研究などにも使えるような予算を中堅のものにも回していただけるようとして欲しいですね。  
小倉 でも、総じて言えばね、文科系の方が、社会科学の方が、実験しない人は多いですから、そういう意味では、器具にはお金がかからない。  
秦 私の場合、共同研究をしています、イギリスまで行って、自分の目で見ないと必要な本や文書が得られません。行くだけの旅費とリサーチの費用そして本を買ってくるために、二〇〇万ぐらい必要になります。お給料の大半を注ぎ込みます。その上で、研究費はどうだということになってしまつから厳しいものがありますね。

千本木 そういう研究予算というのは、今後は減って、増えないから、そこを当てにしたような形での研究はまず無理だと思つてくれ。やるとしたら、科研とか、そういうもので充填するしか研究費はもう獲得できないんじゃないかと思つています。  
久保 校費は研究のための費用と授業運営のための費用として使われていますね。学生がいろいろなこと（失敗とかも含めて）をやってみることも大切な経験だと思うのですが、費用の面で制約せざるを得なくなつてきますよね。やっつてはいけないこと



秦 経済学部助教授

ですが、学生にしわ寄せがという問題があります。  
千本木 今後、大学に運用が任されてる予算の中で、大学がそれぞれ考えていけないとダメです、そうすると真剣に考えない

といけないのは、今後、われわれが研究と教育をどういふ兼ね合いでやっていくか、どういふスタンスでやっていくかということ、より深刻な問題になると思つた。  
小倉 深刻過ぎて。

## これからの滋賀大

久保 滋賀大って、ほんとうに滋賀県の高校生が憧れるというか、入りたいと思つている大学ですよ。ですから、オープンキャンパスに来る人の中に、とにかく何が勉強したいかよりも、滋賀大に入りたいんだという人がいます。歴史があるだけに、そういう意識が強い人がいますよね。

中野 今の久保さんのおつしやつてた話に恐らく関連するんだと思つて、確かに、滋賀大というのは、この地域の学生さんにしてみれば、ある程度目指すところであるのかもしれないですけど、やっぱり、徐々に地盤沈下しているんじゃないかと思つて。恐らく危機的状況に大学全体としてあるんじゃないかとわすれませんが感じています。その状況の進行に比べて対応が遅いような気がしています。もう少しポジティブに見れば、大学の規模はそんなに大きな大学じゃないですから、大胆で自由な対応というのが、本来はできるんじゃないかなと思つて。何かどうも、大企業病みたいな感じの緩やかな対応しか行われてないというのが、不安というか、残念。皆

## サテライトキャンパス

## への試み

が気持ちや団結してやれば、かなりのことが大胆に短期間でできるんじゃないかと思えます。

**司会** 実際、両学部でいろいろな改革案が出てきていると思うんですが、どうでしょう。

**秦** 現在、サテライトキャンパスの話が出ています。交通の便のいいところでの開講を考えてるようですが、その内容はどんなんでしょうか。

**中野** サテライトの話は、前から僕自身も思っていて、滋賀大学に赴任した時どうして経済学部はやらないのかなと、思ったんですよ。というのは、大津は大阪のベッドタウンとなっているので、帰宅途中にでも経営とか、経済を勉強できることになれば需要が多いわけじゃないですか、その発



千本木広報委員、磯西広報委員（司会）

想がどうしてなかったのかなという。

**小倉** ファイナンス関係について来年の四月から、サテライト教室を設けて講義をする計画があります。

**久保** 兵庫教育大が三宮に借りて、大学院生、サテライトの夜間やつたら、ものすごい応募が来たといっていました。

**千本木** それ以前に中部大学が名古屋駅前で開始したんです。大成功をおさめて。その後、みんな我も我もと後追いしたらしいです。結局、後から参入したところは、学生が集まらない。

**岩井** 後追いですと、この規模の大学は絶対ダメなんです。

**中野** 前例を待つてたらダメです。大津という場所で考えると、通勤している人だと京都と一五分の距離というのは、結構良いのでは。もつとも、マーケット・リサーチはちゃんとやった上でないといけません。

**岩井** この前の学長裁量経費で採択されたテーマなんですけど、担当する大学院の授業を試験的に放送型教育にしてみようと、すなわち、インターネット上で放送する試みを行います。逆に教室に行かずに、自宅などでインターネットで聴取することができると。それを今回、試験的にやってみようということなんです。そのなかで何か新しい形態が見られるんじゃないかと思うんですよ。特に、両キャンパスが離れている状況ですと、場所を固定されないような教育の仕方というのは面白いんじゃないかと思いついて。

**司会** サテライトキャンパスとは全く異質かもしれませんが、また一つの方向性かもしれないし、実は、これも今の時期を逃すともうできない。だから、どうしても、タイミングというのが、どうしても付きまっちゃうんですよ。このプロジェクトが認められたというのはうれしい気がしますね。

**久保** 一つの学校でやっているんだったら、やはり、同じキャンパスで、ということを考えてみたい気がしますね。お互いに譲るとは譲って。

**千本木** 冷静に考えると、彦根の方がいいと思う。自分で発展するならば、むしろ、彦根の地の方が、滋賀大のアイデンティティを発揮できるんじゃないのかなあと。こじんまりとするかもしれないけど。ただ、図書館の問題とか、学内の施設の有効利用などを考えると、どうしても一つの場が望ましいことがあるんじゃないかな。両学部が対抗して別々にがんばるのか、あるいはまとまってるがんだった時とどっちが楽か、そして滋賀大の存在を示せるかということを考えて、それはまとまった方がいいよな気がしますね。

**岩井** むしろ大津よりも彦根の方がいいんじゃないでしょうか。

**馬場** 大学間競争の時代に突入したときに、両学部が離れていてはもう太刀打ちできなくなるでしょう。市場原理を理想化して考えない方がよいと思います。教育内容よりも財政基盤やコストの面で淘

# さらなる発展を 目指すために

汰がなされるでしょう。キャンパスを一つにすることで滋賀大学がさらなる発展を遂げるための活路を見い出せるかもしれないと思います。

**小倉** 別な見方では、東京で数大が連携するというのがありますね。それを滋賀大付近で考えると、「あっ、もうA大とB大が連携が相手がない」とかいう感じですよ。滋賀大も含めていくつかの大学が連携するということは現実にはどうなんですよ。

**千本木** たとえば、英語に関してはA大の経営に関してはB大に集中する、というような基礎科目の共有化に、このような連携のメリットはあるんじゃないでしょうか。ただ、このようなやり方は都会で大学が集中していないとキツイ話でしょうけど。

**久保** 都会でなくとも、岩井先生の言われたような、放送型教育ならうまく行きますよね。実際、それを可能にするインフラができていますし、双方向でも可能じゃないかなと思っています。

**岩井** 滋賀大だけでもしましょう。

**中野** どっちかちゃんと方向決めて動き出したいですね。

**岩井** やっぱ、動かないといけませんね。間違っても、動かないとダメ。

**千本木** もしかしたら間違うかもしれないから、今は慎重にしておこうという態度が多すぎると思います。間違ったら、もう一度やり直したらいいんじゃないかという発想をしてほしいですね。

**岩井** そのいう意味では、教育学部の話ですけど、高校の情報科の教員免許を出すことが今度可能になりそうですね。うちが関西圏で一番最初に計画したらいいんですけど、ほんとに良かったなあと思うんですけど、いろいろな要因はあったと思いますけど、チャンスがあつたときにうちがちゃんと手を挙げたから、文部省側も対応してくれて。そう、こつちからアクション起こさないと。

**馬場** 積極的に行動を起こせば道は開けるんですね。それとこの広報を読んでいて感じるのですが、最近、大学の存在意義を市民に問うという考え方が強く打ち出されるようになっていています。ここに飛躍の芽があるように思えます。一つの可能性として、例えば大学が地域住民に学習の機会と場所を提供することによって、逆に市民のもつエネルギーをもらって大学を活性化させるというのはどうでしょう。つまり大学が地域社会の文化的な活動拠点になるわけです。従来の守備範囲を超えて一歩踏み出すことで、新たな展開が可能になるかも知れません。もっともこれは私自身の課題でもあります。

**司会** 本日はいろいろのご意

見を伺うことができませんでした。滋賀大も変わっていかなくてはいいけれども、私たちもその一端をになえれば、と思います。長時間でもありがとうございます。

